

# 山と博物館

第38巻 第12号 1993年12月25日

大町山岳博物館



厳冬の大日岳 写真と文 佐藤 章

厳冬の立山室堂平は、八mの積雪がある上、毎日一m以上の雪が積もっては無くなり、を繰り返す。まるで、「白い牙城」の様だ。

下山予定の一週間目を向かえるが、立山の峰々は姿を現さない。諦めかけ、手を合わせて祈る。「十分でいい、晴れて欲しい」と、しかし、そんな調子のいい「願い事」を聞いてくれる「神様」が居る訳もない。帰る用意しながら時間が過ぎたが、一向に吹雪が止む気配もなく下山を決意した。五、六歩進んだ時、急に回りが明るくなった。空を見上げると雲間から青空が見える。もしかしたらと思いい、急いで戻りカメラを取り出して構えると段々と風が弱くなり音がしなくなる。

雲が動き、山が姿を現す。心臓の鼓動が一段と早くなるのが分かる。大日岳だ！

魅力的な山である。良く撮ろうと前進するが、新雪の為に腰まで埋まり、なかなか進めない、気が焦るばかりだ。雲の動きが気になり益々焦る。一回・二回とシャッターを押し続ける、フィルムを入れ替える、頭の中は何も考えていない、機械のように黙々と手が動き続ける。

白い峰は怪しく光り、心を引き付けて放さない、名前のせい、其とも山の形のせい、か何方にしても「大日岳」とは、よく付けた名と感心せざるをえない。

黒い影が近寄って来た。雲が日を遮って行く、「約束」の時が近付いて来た。もつと居たい気持ちを抑えてザックの置いてある場所まで引き返す。雲の動きが、一段と激しさを増し、上空の青空を消していく。

山での無理は厳禁である。特に天候の急変する冬山では尚更だ。「遭難」と有う二文字が脳裏をかすめる。それだけは避けなければならぬ。急ぎ支度を終え、ザックを担ぎながら「大日岳」に向かい、再度「手」を合わせて頭を下げながら、再会を念じた。

写真家・

日本山岳写真協会会員・松本支部

# 東チベット・ナムチャバルワ峰の気象

飯田 肇

ナムチャバルワ峰は、ヒマラヤ山脈東端に位置する標高七七八二メートルの秀峰で、未踏峰としては世界最高峰であった。一九九二年九月十一月、著者は日本中国ナムチャバルワ合同登山隊（日本山岳会他主催）に気象担当隊員として参加する機会を得た。この隊は幸運にも十月三十日にナムチャバルワ峰の初登頂に成功した。そこで、ここでは同峰の概要、特に現地の気象の概要を紹介したい。

## 一、ナムチャバルワとは

ナムチャバルワ峰は、その天を刺す様な特異な山容、置かれた位置の特殊性から、今世紀初頭以来、登山家・探険家の間で「幻の山」として知られていた。（図1、写真1）



写真1 ナムチャバルワ峰

特に一九二三年、英国人のペイリーらがこの地域を探険し、初めて青いケシを発見したことは有名である。

この一帯は、チベットの大河ヤルツァンポー河がヒマラヤ山脈を縦断するように大きく屈曲する地点にあたり、チベット高原を西から東に流れてきたヤルツァンポーは、ここで川幅一〇〇メートルの激流に姿を変え、ナムチャバルワを取り囲むように弧を描いて標高差二五〇〇メートルの大峡谷を一気に流れ下る。そして、インド平原で東から西に向きを変えてブラマプトラ河となってベンガル湾に注ぐ。

この地形とベンガル湾からたいへん近くモンスーンの影響を受け易いという立地条件から、他のヒマラヤの高峰と比較してたいへん湿潤で天気の良い地域となっている。一般にチベットという乾燥した砂漠のようなイメージが強いが、こんなにも湿潤な地域が存在するのは驚きであった。森林限界は四五〇〇メートル付近で、四二〇〇メートル付近までカラマツ・カンバなどの樹林が発達し、それからはサルオガセが垂れ付近の降水量の多さを実感した。また、大きな谷氷河の末端は三七〇〇メートル付近で、水河が樹林に深く入り込んでいる特異な景観が見られる。三〇〇〇メートル以下のジャングルから、亜高山帯、高山帯と高度差により気候が大きく変化する独特の特性を持った地域となっている。

また、付近には、ユキヒヨウ、ジャコウジカ、草原性のライチョウ、クマ、イヌワシ等多くの動物が生息し、さらに植物についても特異な種類が多い。学術調査の対象としても、たいへん興味深い地域といえる。

## 二、ナムチャバルワの気象概要

ナムチャバルワ峰は、気象変化の特に激しい山として知られている。今までにこの山に挑んだ登山隊は、皆、多量の雪や強風で苦しめられている。いったいこの山の悪天の原因は何なのだろうか。ここでは登山期間中の気象概要を述べてみたい。

一般にヒマラヤ山脈はモンスーンによる降水の影響を受ける地域であり、ネパールでは通常五月下旬から十月上旬までがモンスーンによる雨季といわれる。ナムチャバルワではさらにモンスーンの影響が強く、年により四月上旬から十月下旬までその影響下にあるという。また、十一月に入るとジェット気流の強風軸の南下に伴う強風が吹き荒れ、晴天でも行動不能になることが多い。従って、この山の登頂適期は、十月中下旬のわずかなポストモンスーン期のみであり、本登山もその期間に照準をあわせて計画された。

登山時期の九月～十月にかけて、この山域

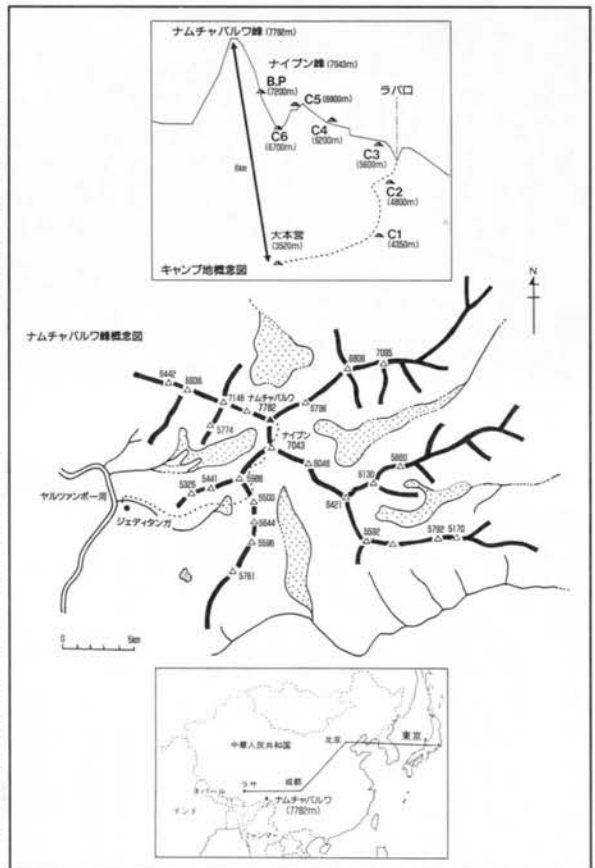


図1 ナムチャバルワ峰概念図

の天候を支配するのは、次の要素である。

- 1、ベンガル湾からのモンスーン気流の流入。モンスーン期の強弱、モンスーン明けの時期が、登山に大きな影響をもたらす。
  - 2、ジェット気流の強風軸の南北変動。ジェット気流は、この時期ヒマラヤの北から南へ移動する。この風の強弱が登山の成否を左右する。
  - 3、上層の気圧の谷の通過。偏西風に伴う上層の気圧の谷が周期的に通過し、悪天をもたらす。
  - 4、サイクロン及び熱帯低気圧の通過。この地域独特のもので、ヒマラヤに時として大雪をもたらす。
- これらの要素が混在して現れるため、九月～十月は天気予測が特に難しい時期となっている。

## 三、登山期間中の気象

ここで、一九九二年の登山期間中の天気概

要を振り返ってみよう。天気変化は、おまかに次の四つのステージにわけられた。

1、9月11日～10月11日 モンスーンによる悪天と中休みの好天。  
2、10月12日～24日 サイクロンの通過とモンスーンの戻りによる悪天、夜間の悪天。  
3、10月25日～31日 モンスーン明けの好天。  
4、11月1日～ ジェット気流の強風軸の南下に伴う強風、気温の低下。

第一ステージはいわゆるモンスーン期間である。九月十一日～十月六日までは、モンスーンの悪天と中休みの好天が交互に訪れた。日中に積雲や積乱雲などの雲が発生・発達し夜間に消滅する日変化のパターンが多く、上層の気圧の谷の通過に伴う悪天はほとんど見られなかった。この期間は、雲は多いけれども降水量が少ない日が続く、上部の風も弱く、前半の登山を順調に消化することができた。ナムチャバルワとしては予想外に穏やかな期間であった。また、十月七日～十一日まではモンスーン気流の流入がなくなり、ベンガル湾、バングラデッシュに今まで見られた雲の帯が消えた。気温も低下してモンスーン明けを思わせる好天となり、この間に第一次アタック隊は順調にC5（六九〇〇メートル）までルートをとるばして登頂体制にはいった。

ところが、この頃よりナムチャバルワは牙をむきだした。十月十二日に、いったんインD方向に去ったと思われたサイクロンが向きを急速に東に変え、弱まりながらも現地付近を通過し、本格的な悪天が訪れた。この後、モンスーン気流が再び現地に流入して悪天が長く続くことになる。この期間は、多量の降雪による雪崩の危険、上空の強風等の悪条件が重なり、結局、第一次アタックはC5までで中止せざるを得なかった。特に十月十四日～二十四日の期間は、夜中に必ず雪が降り、早期出発時に積雪が増して雪崩の危険に見舞われるため連日停滞が続いた。そのため、引

き続き行われた第二次アタックでも、C4（六二〇〇メートル）上の雪崩が危険な斜面を突破するチャンスを見いだせず、撤退せざるを得なかった。この期間は短時間で天候がめまぐるしく変化し、登山期間中でも最も天気が悪い時期であった。

しかし、十月二十五日を境にモンスーン気流の流入がびたりとなくなる。ポストモンスーンの好天がようやく訪れた。それでも、十月二十六日、二十七日は、晴天にもかかわらず北を気圧の谷が通過したため上空の風は強かった。この間、C5では、十日ほどキャンプを放置した間に吹き溜りの積雪が二メートル以上も積もりテントの掘り出しに半日間苦闘する場面もあった。（写真2）また、C6（六七〇〇メートル）では、強風のためテント設営がなかなか出来なかつたしたが、アタック隊員の粘り強い努力で何とかC6まで歩を進めることができた。この二日間の前進は、登頂の成否の大きなポイントとなった。



写真2 C5 (6900m) でのテント掘り出し作業

庄の尾根部にはいったため、今度こそ好天が訪れた。第三次アタックは、この東の間の好天・弱風時に行われ、幸運にも初登頂することができた。特に上空の風が弱かったことが登山の大きな助けになったようだ。この好天は十月三十一日まで続き、アタック隊は安全圏まで無事下山することができた。

登山期間全体を通してみて登頂のチャンスはこのわずか数日間しか見いだせなかつた。この間に、頂上へのルート工作、ビバーク、そして安全圏への下山を合わせて実施することができたのは、本当に幸運だったと思う。そして、登山隊の下山を待つように、十一月月上旬からジェット気流の南下に伴う強風が吹き荒れ、ナムチャバルワは冬の様相を呈し始めた。

全体を通してみて、ナムチャバルワはやはり「悪天の山」だった。地域として悪天域であるということに加えて、その高さにより天気変化が激しいのも大きな特徴である。C2（四八〇〇メートル）、C3（五六〇〇メートル）と高さを増すにつれて雪の降る率が高くなり、また、山稜や山頂にかかったわずかな雲の中でも降雪があった。位置により、そして標高によりめまぐるしく天気が変わる点では、ヒマラヤの中でも最も難しい山のひとつといえよう。

#### 四、気象観測の新たな試み

今回の登山隊では、日本気象協会のご協力を得て、高層天気図や気象情報を毎日FAXにてBCに送信していただき、これが登山成功の大きな支えになった。

また、現地でも、気象ロケットを導入して気象データの収集に努めた。現地では、BC（三二二〇メートル）及びC3（五六〇〇メートル）で一時間毎に気温、湿度、風向、風速、雪温勾配（雪崩の弱層形成条件の監視のため）を自動計測した。また、C3からは得られたデータを無線を使って無人でBCに

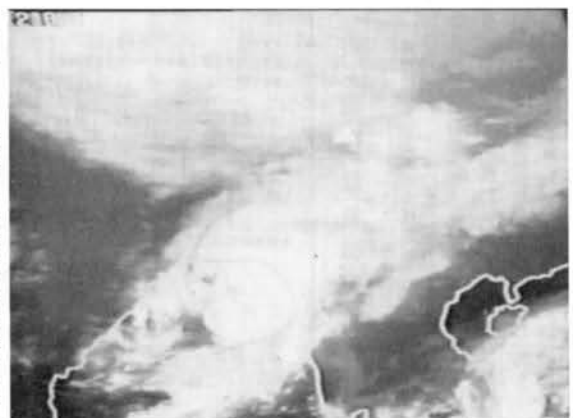


写真3 気象衛星より受信した雲画像  
サイクロンがナムチャバルワ（▲）に迫っている。

リアルタイムで送り、現地での高所観測点として役立てた。

さらに、気象衛星ノアの雲画像をBCで毎日直接受信し、現地付近の雲の分布と変化を追跡した。（写真3）雲のリアルタイム情報は、気圧の谷やサイクロンの追跡にたいへん有効だった。古来雲の観察による観天望気は有効な経験則を数多く生み出している。現代版のヒマラヤの観天望気は、現地のみならず気象衛星からの眼で行われることになるだろう。

これらの新たな試みは、登山遠征隊としては初めての試みであり、ナムチャバルワの激しい気象変化を追うのに大きな力となった。しかしながら、最新の機器を使用してもなおナムチャバルワの天気は読み難く、気象担当にとつてのナムチャバルワは未だに高く険しい未踏峰のままである。

黒部市吉田科学館学芸員  
（日本中国合同ナムチャバルワ登山隊気象担当）

# ブナ林のキノコ(その二)

## ブナ林の今日から明日へ

清沢 由之

### 一、ブナ林の毒キノコ

雑木林、その上にアカマツとコマツガの混生林、その尾根に多くはないがブナが続く。私が毎秋通わせてもらう大町の山の一角。

秋口のサクラシメジから始まり、アマタケ、キシメジ、ホンシメジ、マツタケ、時には、コウタケ、クロカワ、マイタケも顔を出してくるうれしいキノコ道です。

八月下旬、このブナの下に、ああ、今年も、真白で美しいが、日本一の毒キノコ。一本で三人は死ぬとも言われる「ドクツルタケ」が顔を出します。(不幸にも、今年九月、中国の留学生の方の奥さんと四歳の子供さんが亡くなられたキノコです。)

九月下旬、私も協力させていただいている山岳博物館の「秋の草花とキノコ展」には、毎年、ここからいただいています。

毒キノコが多く含まれるテンタケ科の特徴の、根元にツボ、茎にツバを備えています。形態的にやや似るシロオオハラタケは傘の裏が、白からピンク、黒紫と変色しますが、こちらは純白のままです。

もう一つ、ブナの風倒木によく出るのがツキヨタケです。長野県内では、カキシメジ、クサウラベニタケと共に中毒例の多い御三家といわれる一つです。「月夜茸」ですが、おぼろ月夜迄もゆきません。しかし、暗闇に置くと傘の裏が薄淡く光る神秘的なキノコです。いかにもおもしろいような茶褐色が標準タイプ。時に針ノ木岳の登山口や、鹿島槍の西俣出合付近で、ビニール袋一杯これを探った下山者に会い、そこでひと口(譫) 積。シイタケ、ムキタケ、ヒラタケに似るも、裂いてみると



ツキヨタケ

根元に黒いシミ——ロール・シャツハ模様。ただ、私が十数年前小谷村鎌池付近で見たとのは、黄白色、図鑑の色とは大違い。(山博二階の展示写真)。中にシミのないものもあるという人も要注意です。

「さて、伝聞ですが、その昔、山博の先生方が、カモシカ調査が何かで、或る谷へ入られ、営林署の小屋へ一泊。その折、昼間採取した天然のシイタケなるキノコを焼いて食べるところ、この上なく美味。しかし、翌朝、小屋の周囲は、先生方の嘔吐物で一杯だったとのこと。この伝説的な有名なお話の、真偽の程は、知る人ぞ知ることですが。」  
ブナ林にはこの他、ニガクリタケやいくつ

かのテンタケの毒キノコも出ます。私たちは、キノコというところでも、食毒中心に考えがちですが、自然観察の一環として、分解者という重要な役割を持つキノコの側面も大切にしたいものです。

### 二、ブナ林の復権・キノコ園の夢

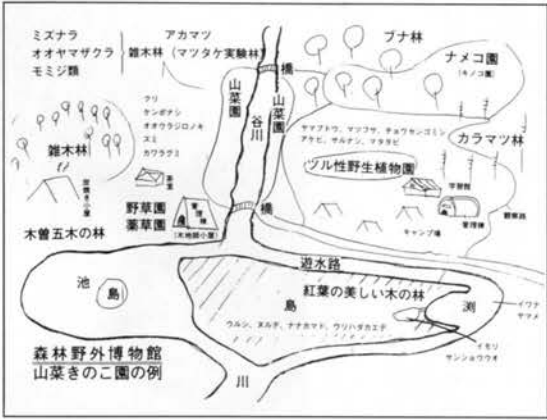
制ガン効果があるとされるコフキサルノコシカケもブナの枯木に出ます。現在栽培されているキノコは約五十種と言われます。そのうち、ナメコ、ヒラタケはもとより、市販商品の二つのシメジ(一つは、ナガエノヒラタケより、もう一つはブナシメジより)もブナがふるさとです。青物としての山菜もブナ林には七十種以上と言われています。適度な湿度を持ったブナ林がこれらの生育の好条件となっているためでしょう。キツツキをはじめとする鳥やけもの、ゼフィルスの仲間の生育地でもあるブナ林。

ヒノキヤスキの美林が有名ですが、心を安めてくれる今後の林としてブナ林を考えたいものです。ブナ林の持つ景観の美。ブナ、ミズナラ帯という言い方を含めた雑木林の価値を考えたいものです。人間の手が入る迄は、もつとブナに囲まれた生活があったはずと言われます。林が金になるかならないかという観点からの森林経営のあり方を根本から見直す必要がありますが、次の世代の森林のあり方の一つとして、ブナ林、雑木林の存在を考えたいと思います。専門家の方々の知識、知恵を仰がねばなりません。

最近、村おこしの一環でしょう。あれっと思ふ所(時にすばらしい雑木林だったところ)に池、展望台、又はアズマ屋のセットを見ます。それもいいが、ブナを中心とした雑木林を。その林床にキノコの発生する工夫を。全体としてキノコ園でもある林を。というの

が私の提案です。昆虫の来る木も大切にしたい。村おこし、即ゴルフ場ではなく、あえて言わせていただければ、進む高齢化社会、今あるゴルフ場もできるだけ中止か縮小し、あいう所にこそ、老人の生きる家や場所を。今のように老人収容的ホームではなく、動けるお年寄りが春には山菜、秋にはキノコを採取して、何がしかの費用にする。夏は昆虫を追う子供たちとも交流する。キノコ園の管理もする。素人のたわ言と笑われ、お怒りの方もいるかと思いますが、「八坂村村誌」のこの利用を参照ください。

(松本市立筑摩野中学校・山博嘱託員)



**山と博物館第38巻第12号**  
発行所 千歳長野県大町市 TEL 026-221-1111  
印刷所 長野県大町市 大町山岳博物館  
定価 年額一、三三〇円(送料共) (切手不可)  
郵便振替口座番号(長野四一三三九三)